

6

セミナーを終えて 黙る力、匿名性、あるいは新しい 学問空間をどう想像／創造するか

松方 冬子

オープンセミナーを終えてのまず率直な感想は、「混沌」ということである。もともと、総論と各論のすり合わせが不十分で、討論の方向性もさまざまであったことによると思う。もちろん、そういう「ケバ」が出ること、つまりは多様な可能性が開かれることも企図していたので、それも予想あるいは期待の範囲なのだが。

一方、語る場をどう設定するか、新しい学問空間をどう想像／創造するかについては、考えさせられることが多かった。まずは、Zoomによってオンラインでオープンセミナーを開いたことで、参加者の数が驚くほど多かった。対面で開催していたころは5人や10人の聴衆を前に話をしていたのに、今回のオープンセミナーの事前登録者は197人（ヒューマニティーズセンターのオープンセミナーで過去最多）、実際の参加者は108人であった。また、質問をチャット（顕名）やsli.do（匿名）で受け付けるというのも私としては初めての試みで、まさに試行錯誤の場となった。

私は当初、匿名と顕名（「顕名」という言葉も知らなかった）が大きな違いを生むとは思っておらず、議論の活性化という点からsli.doの投入はよい判断だと思ったのだが、匿名の相手との議論では責任を伴うような発言はなかなかできない、という登壇者の言もあり、逆に議論の活性化を阻害した側面があったということに気づいた。

「普遍、アゴラ、グローバル・ヒストリー」（『UP』568-571号、2020年）というエッセイを書いて1年になる。「アゴラはいいですね」「松方ゼミはアゴラですね」というような反応をいただくことはあるが、そこに書いたアゴラの閉鎖性などの問題点についてはとくに反響はいただいていない。

私の意見としては、アゴラは別に理想郷ではない。アゴラは、独立し、合理的な判断を下すことができ、自分の意見に責任を持って発言できる一人前の大人（「大丈夫」という表現のほうが良いかもしれない）が構成員であり、アゴラの住人はすべて平等、対等であるという前提がある。そんな大人はいないじゃないか、と思えば、その時点でアゴラは消滅である。自分はそうだ、他人もそうだ、という共同幻想が必要である。

アゴラにはたくさんのルールがあるが、その一つに「顕名」があるのではないだろうか、ということに改めて気づかされた。オープンセミナーで報告者（研究者）が顕名なら、質問者も顕名でないといけない。報告者は顕名でも質問者は匿名でいいとするなら、質問者はアゴラの住人ではなく、お客さん、あるいは観客である。（サッカーの試合で、プレーをしている選手と、観客を思い浮かべていただきたい。顕名なら同じプレーヤーとして参加することになり、匿名なら観客となる。）

オープンセミナーの議論のあり方に「組織」「コミュニティ」のルールを適用し、参加者にその遵守を求める代わりに、一時的に「組織」「コミュニティ」メンバーと同じ発言権を認めるのか、あくまで「組織」「コミュニティ」の外（お客様）との関係として考えるのか、は議論がわかれるところだろう。前者なら「アゴラ」としてのオープンセミナー、後者なら広報／発信／アウトリーチとしてのオープンセミナーということになる。

オープンセミナーが何であるか、というのは極めて曖昧で、あえて曖昧に作ってあるともいえる。組織としての東京大学、コミュニティとしての人文系の学際／アカデミアに深く関わりつつ、両者がやや硬直化、制度疲労を起こしている——既存の構成員にとっては極めて心地よい空間ではあるものの、全体としてはゆっくりと劣化・衰退していく状態——なのかもしれないということで、あえて、その壁を破った活動をヒューマニティーズセンター（HMC）は志しており、オープンセミナーはその目に見える形である。そのため、意識的に「組織」「コミュニティ」の外との接点を作ろうとしている。

対面で、聴衆の数が一桁のときは、アゴラとしてのオープンセミナーをイメージすることも可能であったが、オンライン開催による人数の増加でそれが難しくなったということなのだろう。語る力は、「聴く」力と一緒にあって、信頼を生む（鷲田清一『「聴く」ことの一臨床哲学試論—ちくま学芸文庫、2015年）。双方向にするには、人数をある程度制限せざるをえない。そもそもオンライン会議システムを使った公開セミナーは、参加人数に限らず、アウトリーチには向くがアゴラの議論（創造性）には向かない、という意見もあり、賛成である。画面越しでは議論の基礎となる信頼関係の醸成がしにくく、感情面（いわゆる「空気」？）の共有がしにくい。

アウトリーチなのだとする、今回は、報告者の側の準備不足だった。一人一人は時間をかけて準備したのだが、相互の連携までは十分とれていなかった。もちろん、代表者である私の力不足なのだが、言い訳をさせていただければ、コロナ禍により対面での研究会ができなかったことが手痛かった。それに、もともと

既存の学界の分野を超えて対話するということが、そんなに易しいはずもない。

「語る力が権力を作る？」という本セミナーのテーマに戻ると、私の暫定的な結論は、語る力は権力を作らないというものである。むしろ、黙る力が権力を作る。「黙る」のなかに、官僚答弁（語っている振りをする）とか、あからさまに不機嫌になるとか、黙って部屋を出ていく（離脱する）とか、そういうものも含めてよいだろう。何も言わないことによって、忖度させる。話がわかりやすくて、信頼できる人と、何考えているかわからなくてコワイ人。どちらに従うだろうか？ たぶん、コワイ人に忖度して従い、信頼できる人に甘えて犠牲にするというのが一般的である。そして、「組織」や「コミュニティ」に忠誠心のある信頼できる人を犠牲にし、摩耗させ、孤立させ、使い捨てるなら——つまりは泣き寝入りをさせるなら——もう誰も何も語らないだろう。

しかし「語る」力は、「聴く」力と組み合わせるなら、「権力」ではない単なる「力」を生み出すだろう。ここでいう「力」は「権力」と違って、双方向的である。どちらか一方が得をするとか、そういうものではない。アウトリーチは「課題発見」のための、アゴラの議論は「課題解決」のための「力」となる、ということかもしれない。

いずれにせよ、新しい学問には新しい言葉とともに、新しい作法が必要なのだろう。そして、本セミナーがそれを作っていく一歩になったことはたしかであろうと思う。